talk! talk! talk! 女優・小出早織さん

女優

小出早織さん

15歳でデビューし、ドラマや映画で目覚ましい活躍を続ける女優・小出早織さん。話題作への出演が続き、現在注目を浴びている若手女優のひとりだ。落ち着いた受け答えと、芯の強さを感じさせる言葉は、19歳であるということを忘れさせるほど大人びた印象を受ける。そんな彼女が写真を始めたきっかけは、父親からカメラをプレゼントされたことだったという。暗室作業に没頭した日々や、芝居と写真に共通するものづくりへの想いなどを、今後の夢とともにうかがった。

プロフィール

こいで・さおり。1988年、京都府京都市生まれ。2003年に「東京少女」（BS-i・BSフジ共同制作）で女優デビューして以来、話題作に次々と出演し、容姿はもとより演技力でも評価が高い。
主な映画に「天使」（宮坂まゆみ監督）「ケータイ刑事THE MOVIE2 石川五右衛門一族の陰謀〜決闘！ゴルゴダの森」（田沢幸治監督）「Water」（吉田修一監督）「舞妓Haaaan!!!」（水田伸生監督）。
主なテレビに「ほんとにあった怖い話」（フジテレビ系）「ファイアーボーイズ〜め組の大吾〜」（フジテレビ系）「夜回り先生」（TBS系）「電車男」（フジテレビ系）「1リットルの涙」（フジテレビ系）「ケータイ刑事 銭形雷」（BS-i）「帰ってきた時効警察」（テレビ朝日系）など。

Beginning 出会い

放課後の暗室で 写真に没頭した高校時代

写真を撮り始めたきっかけを教えてください。

高校2年生のときに、父親からカメラをプレゼントしてもらったことがきっかけです。私の父は高校生の頃写真部に入っていて、鉄道写真などをたくさん撮っていたみたいなんです。父から写真部にいた頃の話や、「写真はすごくいいぞ」という話を聞いていて、私も写真を撮ってみたいなと思うようになりました。それで「私も写真が撮りたいな」と話したらカメラを買ってきてくれたんです。

初めから本格的なカメラで撮られていたのですか？

はい。と言ってもちゃんと使えるのかわからないくらいの、ボロボロの中古カメラだったんです。でも、傷があったボディの部分には父が酒袋を切り貼りして修復してくれたり、皮のストラップが似合うからと言ってつけてくれたりと、いろいろ手を加えてくれたものをプレゼントしてくれたんです。

カメラの使い方はお父様から教わったのですか？

そうですね。父にカメラのことをいろいろと習いながら撮り始めました。楽しくてたくさん撮っていたんですが、だんだんDPEに出してプリントしてもらうより、自分で焼きたいなと思うようになったんです。撮影も現像もプリントも自分でやりたい！ という欲が出てきて。そう思っていた頃、通っていた高校に写真部があるということを知ったんです。でもどうやら人気がなくて、幽霊部員が3人だけというさびれた部活だったんですね。ほとんど誰もいない状態だと聞いて「これは思う存分できるチャンス！」と思い、顧問の先生に話をうかがいにいったんです。そうしたら「使う人がいないから好きなように使っていいよ」と言われて。ちゃんと部費もおりるから写真材料もたくさん買えるというすごく良い環境でしたね。まさに私を待っていたような状態だったんですよ（笑）。

暗室作業もご自身でできるようになったのですね。

そうなんです。顧問の先生はもう定年が近いくらいのお歳だったんですが、ずっと写真部の顧問をやられていた方だったんです。写真に関する知識も豊富で、暗室作業は全部教えてくださいました。物覚えが悪い私にマンツーマンで一生懸命教えてくれて。一通り手順を覚えてからは、放課後一人でもくもくと現像、プリントと暗室にこもって作業していましたね。

学生の部活動というと友達を作って、一緒に活動してというイメージですが、写真部では友達を誘ったりせずに一人で活動されていたのですか？

はい。私は誰かと一緒に同じことをやるのが苦手な方なので、一人で地味にやっていましたね（笑）。
もともと何かものをつくることが好きだったんです。だから自分でプリントもできるんだと思ったらもうそれだけですごく楽しくて。

暗室へはどのくらいのペースで入っていたのですか？

高校2年生で入部して、それから1年間はほとんど毎日暗室に入っていましたね。本当に没頭していました。現像液の温度や、露光時間の調節は難しかったんですが、自分が想像した通りの階調にどんぴしゃでプリントできたときは本当に嬉しかったですね。
部室に水場がなかったので、現像やプリント作業で水を使うときは一回部室を出て洗い場まで行かなくてはいけなかったんです。一人で洗い場で作業していると、運動部の人たちが通り過ぎていって「あいつは何をしているんだ」とか、先生たちからは「写真やっているのか」なんて声をかけられたりしました（笑）。

Pleasure 楽しみ

とどめておきたい一瞬を 写真に残せるのは素敵なこと

普段はどういったときに撮影しているのですか？

散歩しているときに撮ることが多いですね。自分に時間があって、のんびりしているときなんかに写真を撮りに行きたくなるので、ふらりとカメラを持って出かけるんです。カメラ片手に歩きながら遭遇した、気になったものやいいなと思ったものに対して素直にシャッターを切っています。あまり構図などといった難しいことは考えず、ただ心のままに、たくさん撮っています。

小出さんのブログには写真もたくさんアップされていて、多くの方が見ていると思いますが、撮った写真は誰かに見せることが多いのですか？

いえ、ブログの写真は全部携帯の写メールで撮っているもので、普段カメラで撮っている写真を誰かに見せるということはほとんどないですね。恥ずかしいという気持ちがありますし、人にお見せできるようなものではないと思ってしまうので。でも以前、友達のカップルを撮ってあげたときにすごく自然な2人の笑顔を写真に収めることができて、それをプリントしてプレゼントしたことがあったんです。2人がとても喜んでくれて、私自身もすごく嬉しかったです。そのときの喜びは今でも強く心に残っています。
普段写真を見せるとしたら父くらいですね。父とは仲が良くて友達みたいな感じなんです。写真を始めたのが父の影響だったこともあって、撮った写真を見てもらいたいと思いますし、アドバイスをもらったりもしています。父はD200を使っているんですが、今回の取材のことを話したら「でかした！」と言ってとても喜んでいました（笑）。

小出さんが感じる写真の魅力は、どういったところですか？

一瞬をとどめられるところでしょうか。私は歩くのが好きなんですが、歩いているときに「いいな、とどめておきたい」と思う光景に出会うことがあって。たわいもないものだったりするんですが、そのときの一瞬をとどめられる、残せるというのは素敵なことだと思いますね。
それに、写真はお芝居をさせていただく以外で、自分の感じたものを表わすことが出来るものだと思います。心動かされたものや、自分の感情を写真上で表現することをとても面白く感じます。

自分を表現する手段として写真が存在しているのですね。

そうですね。写真自体がものすごく特別な存在ということではなくて、自分が感じたものを表せる手段のひとつという感じです。プリントした写真を見ながら、「このときは、これが好きだったんだ」、「あのときは、こんな景色を見てたんだ」と振り返ると、その瞬間の気持ちもよみがえってきます。写真には思ったことや、感じていたことが吐き出せているんです。

Photo's 作品紹介

小出さんを表すような 静かでやわらかな写真たち

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

Future これから

日本の四季や 実る野菜を写真に収めたい

お芝居を始められたのも、自分を表現したいという気持ちからだったのですか？

いえ、そういう気持ちがあったわけではないですね。中学2年生のときに映画のオーディションを受けたんですが、その頃の私は部活動をしているわけでもなく、何もやっていない状態だったんです。周りのみんなは部活動に打ち込んでいるのに、自分自身は特に何もやっていない。でも、何かをやるならみんなと違うことがしたいなと思って、オーディションを受けてみたんです。思えば無謀なことだったのかもしれないけれど、自分の周りの環境からちょっと抜出してみたかった、みんなと違うところに行きたかったんですね。
試しにやってみようと思って受けたそのオーディションがとても楽しくて、監督さんのこともすごく好きになったんです。結果的には落ちてしまったんですが、閉じこもっていた心が、パンッと開いた気がしました。自分はこんなこともできるんだなと気づいて、もう少しお芝居がしたいと思ったんです。それで、無料でレッスンをしている今の事務所のことを知り、親にも負担がかからないかなと思って応募しました。

小出さんにとって、自分の内面の世界を外に出すということが、お芝居も写真も共通しているのですね。

そうですね。今考えると中学2年生の頃はもやもやした気持ちでいたと思います。それを吐き出せたのがオーディションだったのかもしれません。

お仕事のことでこれから挑戦したいことなどはありますか？

いつか舞台に立ちたいです。今すぐというわけではなくて、長い目でみて将来的に舞台でお芝居が出来ればいいなと思っています。今はいろいろな作品にキャスティングされることだけでとても嬉しいんです。映画やドラマを作るときに私を必要としてもらえること、ものづくりをする人たちの一員になれることがすごく嬉しくて。役に立てたらいいなと思います。

様々な役で自分を表現できるのは楽しそうですね。

そうですね。でも、自分からどんどん表現していこうというよりは、監督さんが求めるものを表現しようという感じです。作品は私のものではないので、求められたことを頑張って表現しようと思います。だから演出されたことに応えられなかったらすごく悔しいですし、演技を納得してもらえたときはとても嬉しいです。もちろん、そこに自分らしさも少し入れられるのがベストですけどね。
みんな普段の暮らしの中では、なるべくスムーズに生きられるように、周りと自分の間に壁をつくって本当の部分を隠していたりすると思うんです。私は特にそういう部分が強いと感じるんですね。でも様々な役を演じることで、普段自分の中に隠れているいろんな要素を反映していける、出せる。その作業がとても面白いです。

では最後に、これから撮りたいものやカメラを持って行きたい場所などがあれば教えてください。

私は日本の四季がとても好きなんです。花もよく撮るんですが、そういった季節を感じるものを写真に収められたらいいですね。あとは野菜が好きなので、実っている旬の野菜を各地に撮りに行きたいですね。これからも撮りたいと感じたものに、なるべく素

直にシャッターを押していけたらいいと思います。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.